

W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第43号

モーツァルトを聴ける至福を噛みしめて

モーツァルトへの手紙 (その19)

会員番号 K.618 加藤 明



◇モーツァルトよ、小生は相も変わらず、「あなたを向いて」日々を過ごしております。もっとも最近では、以前のように毎日集中して聴くというスタイルから抜け出して、いわばブーメランが飛翔するように回帰的に耳を傾ける場面が増えたように思います（何故か、古今の多くの演奏家によるピアノソナタやヴァイオリンソナタに自然に触手が動いてしまう傾向ですが・・・）。

この間に、たとえばブルックナー（ケーゲル、シューリヒトラの後期の交響曲）、シューベルト（シュワルツコップ、シュライヤー、ポストリッジらの歌曲集）、ストラビンスキー（特にデュトア、ブレーズらの「春の祭典」）、などを憑かれたように聴いた後の言わば浄化的なあなたの音楽の瑞々しさは、耳から脳を通り越して「こころの大掃除」をしてくれているようでもあります。

それは、あなたの音楽が小生のなかでは母なる大地のような神々しいものとなっているからかも知れません（例えば、クレンペラー指揮・フィルハーモニーと名手アラン・シヴィルが1961年に録音したホルン協奏曲集は、こういう神々しいという表現しか思い浮かばない名演です）。言い換えれば、おのれの懐かしいふるさとに帰還したアウトサイダーが期せずして深い安寧の心を発見するようなもの

かも知れない。その理由は、たぶん小生が過去40年余りに渡ってあなたの最初期から最晩年の音楽をランダムに聴き続けてきた結果、あなたの音楽言語（言葉）が身体の隅々まで浸透してしまったことから生まれる独自の反応（変化）なのかも・・・と恣意的に考えています。

小生はあなたの紡ぎ出す音楽の特性を「軽やかで自然でシンプル、そしてまるで隣人と話しているかのような口語体の響き」に見出しておりました。今でもそのあなたらしさは変わることはありません。

そんな人々の耳朶に易しく寄り添い、いつも愉しさと特異な安堵感をもたらすあなたの作品ですが、しかし一旦「どうしてモーツァルトはこれほど凄い音楽をこんなにもたくさん創れたのだろうか？」と素朴な疑問を懐きはじめ、ついめり込んだら最後、一生抜けられない迷路にはまったも同然でご当人には異次元の運命（音楽的な人生）が待ち受けているのです。脅すわけではないのですが、ミステリアスな長いトンネル、素敵な友人といるようでも決して返答（納得できる回答）のない暗闇が待ち受けているのです、よ！（笑）

そういう意味では、こと音楽芸術の世界にあって、あなたほど興味深く怖い人は他にありません。

そして古希を超えた今日では、あなたに向き合う時のエキサイティングな感覚を懐きつつも、この途方もないトンネルから抜け出そうなどは少しも考えなくなり、あろうことか、この奇妙な諦念を大事にする己に気づくのです。言い換えれば、あなたへの向き合い方は、ひたすら「聴きこむ」こと、ただし決して「解ろう」としてはいけないのだ、という信念すら懐くようになったのです。



例年に比べ明らかに積雪の少ない新年を迎えた令和二年でしたが、正月早々身内に忘れることができない不幸がありました。

次兄の嫁にあたる義理の姉が忽然とあの世に逝ってしまったのです。

10日の午前に浦安の葬儀会場で故人と対面しました。棺の義姉が生前のままの穏やかな面差でしたので、しばし何か不思議な安堵感に浸ってしまいました。

仏式の葬儀は終始淡々とした進行でした。しかし、整然として厳か、「言葉少ない慈しみ溢れる人生をまっとうした義姉」（小生が彼女を悼んで書いた詩文の一条）を送るのに相応しい家族葬で、正に今日的な弔いの儀式でした。

小生にベートーベンの「運命」やあなたの「トルコマーチ」を最初に聴かせてくれた喪主の次兄。昔から西洋音楽に興じ、朴訥で心優しい彼が意外に気丈に振舞っていたことが新鮮な驚きだったし、嬉しく思ったものでした。

そうだ、今年は次兄の大好きなベートーベンの生誕250年祭に当たる年だ。これを機に、あまたのベートーベンのコンサートに出かけて、義姉の分まで愉しんでくれたらいいと願掛けしつつ、同行した二人の姉と一緒に秋田に帰りました。



同じ1月の下旬、お付き合いを頂いている《日本モーツァルト愛好会》の創立40周年記念コンサートに東京在住の甥の息子と二人で行ってきました。記念のプログラムはオペラ『コジ・ファン・トゥッテ』（第一生命ホール）。



ピアノ伴奏による演奏会形式の上演でしたが、実力派六人のソリストによるとっても観応え・聴き応えのある豊かな3時間のコンサートでした（演奏会形式のため、ピアニストへの負担が大きいのですが、終始素晴らしい伴奏で拍手喝采でした）。

《モーツァルト広場》の会員でもある代表の朝吹英和氏から、ご丁寧にもこの記念公演のご招待券を頂戴し、胸ときめかせて会場入りしたのですが、600名を超える会員の皆さんで会場はいっぱい。「さすが、東京！スケールがおおきい」と密かに眩いてしまいました。

小生も、甥の息子も初めての『コジ・ファン・トゥッテ』のコンサートでしたが、二人とも終始ステージに身を乗り出すようにして愉しみました。

そして、モーツァルトよ、たくさんのアリア

に陶醉しながら、改めてあなたの紡ぎ出す音楽の人を惹きつける偉大さに気づかされました。

帰路、電車の中で突如として、「《広場》も30周年が間近だけど、どうしよう？」といった不安な気持ちが湧いてきて、狼狽えたものです。こういう記念企画の大変さが生々しく想像されたからでした。

こうして、『コジ・ファン・トゥッテ』鑑賞後の感動の余韻と共に《広場》の運営方針の検討という新たな実務的な課題が俄然気になって来るのでした（笑）。



ところで、モーツァルトよ、前述の通り今年2020年はあなたの14歳後輩のベートーベンの『生誕250年祭』の記念すべき年に当たります。

昨年の秋頃から、世界中このベートーベンを盛り上げるべく多くのコンサート企画が喧伝されておりました。

当地秋田においてもアトリオン音楽ホールで2月23日先陣を切って『第9番合唱付き』が演

奏され、大変感銘深く聴くことができたことは正に僥倖とも言える出来事になってしまいました。

というのも、昨年末中国で発生をみた新型コロナウイルスによる国内感染が丁度このころから広まり始め、この『第9』のコンサートの後は殆どアトリオンでも公演を中止せざるを得なくなってきたからです。

今回の『第9』には垣内悠希指揮・山形交響楽団、藤原歌劇団からの4人のソリスト、そしてアトリオン合唱団・同少年少女合唱団が満を持して臨んだ画期的な名演だったことが、僥倖という意味なのですが、実はもう一つの「もっけの幸い」がありました。

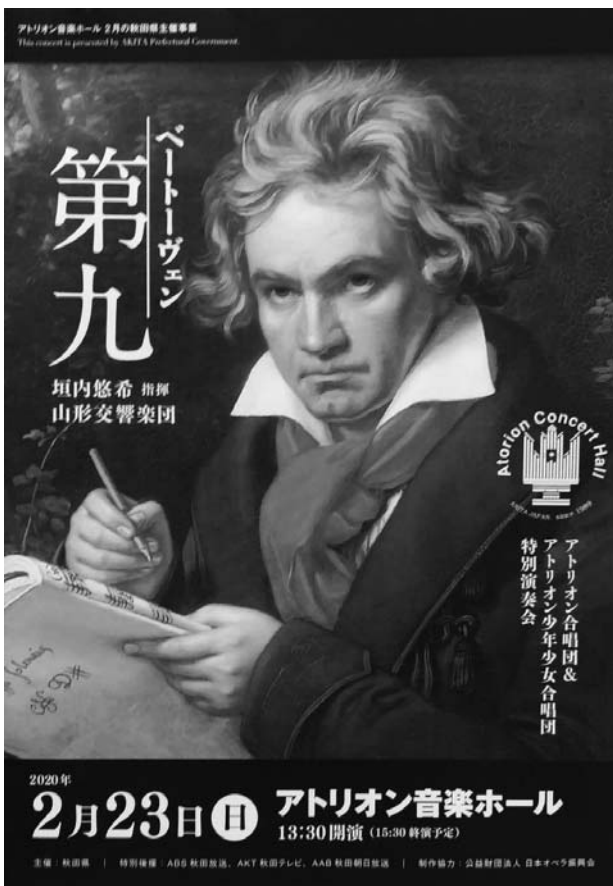
それは、小生のたった一人の孫娘（小学5年生）を嫁さんともども連れ出し、初めて一緒にこの記念すべき『第9』を愉しんだからなのです。

以前から嫁さんの影響でピアノを少し習っていることは知っていましたから、きっとスケールの大きな交響曲にも喜んで反応してくれるのでは？と期待しておりました。そしたら案の定、コンサート終了後は爺さんの期待を裏切らない素直な喜びの表情を見せてくれたのでした（昨年の春にこの孫娘はアトリオンでのピアノ教室の発表会で『トルコマーチ』を弾いておりました）。

しかし、ああ、3月以降新型コロナウイルスの影響でベートーベンドころか殆どの公演・発表会などが中止となり、こころ塞がる日々が続くことになる訳です。そういう意味でも、この二重の僥倖は深く小生に刻み込まれているのです。

モーツァルトよ、小生はこんな価値観の激変期においても、いやこんな時だからこそ、人々に寄り添うあなたの音楽がいよいよ真価を発揮することを確信しています。あなたへの感謝の念を伝えて脱稿とします。

end



新文化施設の暗雲

会員番号 K.10 畠山久雄

前回の寄稿タイトルは「新文化施設の暗雲」でありました。ちょっとだけ復習すると・・・秋田県と秋田市は秋田県民会館を解体し、跡地に新文化施設建設し令和3年度に完成させる予定で工事に着手しました。施設は約2,000席の大ホールと約800席の中ホールがメインであり、完成後には秋田市文化会館も廃止となります。つまり県民会館・ジョイナス、文化会館全てが廃止され、新文化施設に統合されます。(ここまでが前号)

私は施設の備品について、事務屋だけで備品選考をすることは誤りで、専門性は不要という考えも事務屋さんの思い込みに過ぎず、県民・市民をないがしろにした思い上がりを感じていました。秋田県最高の文化施設に相応しい楽器を選定すべく、有識者による備品選考体制が構築できるのか、秋田の将来に重い暗雲が垂れ込めています。と書きました。

残念ながら、有識者による備品選考体制も闇の中、暗雲は晴れません。『アトリオンのピアノ台数は多過ぎて県財政を圧迫している。』な

ど、立場をわきまえぬ文化施策批判をする前文化振興課長も異常でした。

昨年、10月になって中ホールには反響板を設置しないことが判明しました。行政は劇場コンサルタントの助言を得て、演劇等に特化した特殊なホールにする方針を明確にしました。

これでは、マイクを使用しない学校教育の諸活動や合唱・器楽演奏には極めて不都合であり、ホールは演奏会場として使えないのです。多くの県民・市民がそのように願っていたのでしょうか、違うでしょう。

不思議にもこの特殊なホールは誰のための施設で、誰が喜ぶのか我々は知りません。

一方で、移動式の音響反射板、いわゆるつい立て式で対応するといった報道もありますが、つい立て式では垂直方向の音に対応できずに水平方向の音を客席に届けるだけであり、音のエネルギーの半分以上はステージ天井裏の巨大空間に吸い込まれ、効果は期待できません。

いわゆる収納式の反響板は、建設中のあきた



新文化施設 備え付け反響板設置を
県管弦楽連盟 秋田市議会へ請願書
 県と秋田市が建設を進める新文化施設・あきた芸術劇場の中ホール(約800席)について、県管弦楽連盟(羽川武代表、6団体)は1日、備え付けの音響反射板(反響板)を設置するよう求める請願書を秋田市議会に提出した。4日開会の市議会6月定例会で審議される見通し。
 請願書では▽現行の設計では、マイクを使わない学校教育の諸活動や合唱・器楽演奏にも同様の請願書を提出する予定。
 (内田洋子)

令和2年6月2日付あきた魁22面

芸術劇場大ホールを初め、全国の多目的ホールに設置されております。中ホールも反響板を備えた多目的ホールとして、多くの分野の県民が舞台を利用できるようにすべきなのです。報道から演劇と音楽の対立と捉えた方もいたようですが、現実には多くの演劇関係者が、反響板を設置して音楽でも使えるホールにすべきと考えています。

もはや工事が始まっておりますが、少なくとも50年以上は使い続ける文化施設が、演奏には使えない特殊なホールではいけません。施設が完成してから「やっぱりダメだった。」「10年後に手直ししましょう。」では多額の費用と時間を無駄にします。

このまま行政にお任せしては「**大変だ〜**」と、反響板設置を陳情する署名（秋田県管弦楽連盟代表 羽川 武）がスタートし、県内外の皆様のご協力を得ながら、署名総数は既に1万筆を超え、活動は継続中です。県と市の6月議会には署名総数を記入した請願書を提出しました。

新型コロナウイルス問題で、あらゆる分野が立ち止まっている中、行政は民衆の声に耳を傾け、多くの県民が舞台芸術を楽しめるようなホールとなるよう、立ち止まって考えてほしいものです。

酒とモツの日々 (43)

会員番号 K.488 佐藤 滋

新型コロナウイルスの為に今年は大変な一年になりました。私たちにとっては初めての経験でも、歴史的に見るとコレラ、ペスト、スペイン風邪等、多くの人命を奪うパンデミックがありました。1767年、モーツァルト11歳の時にも天然痘の大流行があり、旅先のウィーン宮廷の大公女が亡くなって演奏会は全てキャンセル。（プロの音楽家はいつも最初の被害者です）それだけでなくモーツァルト自身も罹患し生死を彷徨います。父レオポルドの懸命の看護のおかげで一命を取りとめますが、あやうく人類の文化遺産ともいえる多くの音楽作品が消えるところでした。正岡子規は死の病の床で「病牀六尺」を記し、そのなかで病人にも看護人にも、学ぶ姿勢がいかに大切か、をくどくどと書いています。幼いモーツァルトは、死の病、演奏会中止、外出禁止という状況で、どんな病床の日々を過ごしたのでしょうか。

私は時々東京へプロオケの演奏会に通い無上の喜びを得ているのですが、先日中止の案内が届きました。演奏会中止が続けば、プロの楽団経営はままなくなります。人に喜びを与える仕事ほど、脆い職業は無いです。一日も早い再開を待ち望みます。

政府のお達しで外出できないため、録り溜めしていた昔の映像を観ていたらフィラデルフィア管弦楽団の演奏にいたく感動してしまいました。ベルリンフィル等と比べたら結構ミスがあり、個人芸やアンサンブルの洗練には難があるのですが、弓を一杯に弾ききる弦楽（その分、小回りの効かない一徹さと豊かな鳴り）、金管の猛者を支える女性チューバ奏者（この地位を得るまで彼女にもドラマがあったのだろう）、指揮者から目を離さぬフルート奏者（時にアンサンブルからはみ出しても燃えような積極性）、表情豊かな中国系コンサートマスター（チュー

ニングの音を外すほど緊張していたが全身で音をまとめた頼れるリーダー)。そして様々な皮膚の色（昔の小話で「フランス人が作曲し、ドイツ人が演奏し、イタリア人が歌い、イギリス人が聴き、日本人が録音し、アメリカ人が金を払う」というのがありました）、この楽団はワン・チーム。みんな違って、みんな素敵！）。そして力を合わせてカナダ人の指揮のもと「新世界より」を演奏している。「ああ、これが音楽なんだ。」減点対象は沢山あっても、この人たちは音楽に一番大切なものが何かを知っている。それは、解散の危機を乗り越えた楽団の強さなのか、全ての人種・過去・思想を受け容れる温かさなのか、ミスを恐れず身も心も音楽に捧げ尽くす奉仕の心なのか。人間を感動させる演奏とは、完全無欠よりも、誠実が個性となった表現ではないのか。この楽団にはその一番大切な「仕事への誠実さ」がある。批評がどうあろうと、私はこのポジティブな演奏に心を奪われました。

今年は多くの楽団が倒産するでしょう。フィ

ラデルフィア管弦楽団もわかりません。（実際一度倒産している）でも、この楽員は個になっても生き延びてゆけると思います。なぜなら音楽を通して「誠実さ」を学んでいるから。学ぶ姿勢を持っているから。

正岡子規が求めたのは、病人・看護人双方の「誠実さ」だったのでしょうか。父レオポルドが示したのは息子の命への「誠実さ」だったと思います。11歳のモーツァルトは演奏活動ができない時に、かえって内的な芸術家としての本能に従い、猛烈な勢いで交響曲の作り方を学習して行きます。続けざまに7曲作曲してしまいます。彼は自身の天才に「誠実」であることで、病はその才能を鍛えたのです。

今、コロナに苦しむ私たちに必要なのは「心と言葉と行いと命」への誠実ではないでしょうか。

カミュは小説「ペスト」のなかで、生き残った主人公の医師にこう語らせています。「ペストと戦う唯一の方法は誠実さです」と。

編集後記

編集後記では毎回楽しく幸せになれるような話題を書こうと思っているものの、新型コロナウイルス感染症の影響がここまで大きくなるとは想定外でした。『この世に生き残る生物は、激しい変化にいち早く対応できたもの』という言葉のように新しい生活様式にあわせて我慢ではなく、楽しみを見つけて暮ら

していきましょう。モーツァルトの音楽が心の癒しになり穏やかになりますように。

そうそう、この春中学に進学した我が家の3番目がトランペット吹きになりました。これで家族6人中4人が楽器吹き。いつかアンサンブルでも楽しめればいいなと思う今日この頃です。(K575)

「モーツァルト広場」ではいつでも会員を募っております(R2年6月現在90名) [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途) ご紹介下されば幸いです。

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田 (事務局) 080(1673)8322